

小田原史談

第 192 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

小正月のだんご・まゆだま

聞き書きから知る物づくり

左の写真は「足柄平野の思い出」曾我保夫著(当史談会副会長)の中にあつて、昭和三十五年頃に久野地区の一農家で撮つたと

聞き書きから知る物づくり
いうことです。
古来からの小正月行事へまゆだまの、物づくりを中心に聞き書きしました。左の写真を



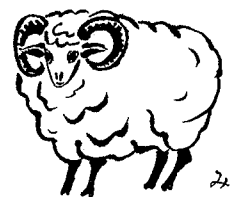
神棚の前の座敷に飾られたまゆだま

ながら、使つた粉や、作つた物、刺した木などを聞きとり、粘土で「こんな物を作つた」と再現していただきました。(後の写真)作つた物への理解に役立てば幸いです。

話者は、田場所

(栢山・成田)、山つき(久野)町中(本町)の古老です。戦前(太平洋戦前)の生活を体験してきた年齢層です。古来からの伝

平成十五癸未年
頌春



カット絵 内田美枝子

承を、多少なりとも引継いできた面があるうかと存じます。話や作品の中から、このご賢察を期待するものです。

一、田場所

○栢山地区



曾我保夫さん(大正元年生まれ)

キンさん(大正六年生まれ)

1、使つた粉(きな)の粉一升。家では昭和三十年代まで、石臼で粉にしました。一升の粉を使いましたが、ひくのに一時間かかりました。夜なべ仕事に、おばあさんと二人で、石臼から出る粉を、ふるつては入れてひき直す、これを三回くり返して、仕上げました。

十四日の午前中に、だんご作りをしました。木鉢に粉を入れ、お湯を入れながらこねてゆきます。耳たぶの柔らかさと同じぐらいを感じた時が、丁度いい練り具合でした。最後は食紅(赤、緑、黄)を入れて、色をとりそ

ろえました。

2、作ったもの

色とりどり(赤・白・緑・黄)

に、いろんな物を作りました。

デিশヨ(大きい)だんご二つ

①、大判②、小判③、まゆだま

④、普通のだんご⑤、宝船(俵

七俵)⑥、里いも⑦、大根⑧、

人参⑨、さつまいも⑩、綿の花

⑪など、たくさん

ん作りしました。

これをはやぶ

かし二段に入

れて、三十分程

ふかしました。

箸でだんごを

つつとして、

スーと抜けたら

ふけた証拠で

す。箸にだんご

がくつついてく

ると、まだふけ

ていないと判断

しました。

ふけあがった

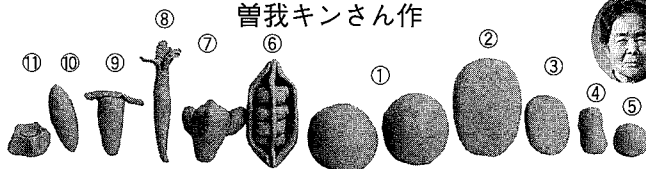
ら、だんごを木

鉢に移して冷ま

します。団扇で



曾我キンさん作



あおぐと、だんごに艶が出てき
ます。いきなりだと、色が悪い
です。

3、刺した木

酒匂川近辺に生えていたねこ

柳を、とってきて使いました。

大きいデিশヨのだんごは、頑

固な幹の一番上につけました。

小さいだんごやいろんな物をあ

ちこちに、配色よろしく成らし

てゆきました。きれいに仕上げ

て、満足したものです。

大神宮さんや年神さん、荒神

さん、お稲荷さん、仏さんに、

小枝のだんごを供えました。

○成田地区

数馬フクさん(天正十三年生まれ)

1、使った粉IIさなごの粉一

升。沼田の製粉所でひいてもら

いました。粉にお湯を入れてこ

ねました。ばらばらだった粉が、

だんだんと一つにまとまってい

ます。丁度いい時は、耳たぶと

同じ柔らかさになった時です。

赤や緑・黄にそめたのも作りま

した。

2、作ったもの

大玉二つ(おばあちゃんがいた



前号2ページ掲載地図「小田原宿本陣旧跡」補記

この地図の原図は色刷でしたが、本掲載のものは黒一色で

す。そこで凡例の一つ「江戸時代よりの旧家」は、原図緑色で

判別容易でしたが、本掲載のものはよくわからなくなりました。

改めて「旧家」を説明しますと、西から外郎、小西薬局、

小伊勢屋旅館、古清水旅館でした。

(中村静夫)

頃で、私の代はこしらえなかつた
普通のだんご、まゆ玉、大根、
人参、宝船、花など、色をつけ
てきれいにこしらえました。

これをはやぶかしに入れてふ

かします。「二十分ぐらいでふけ

る」という通りでした。だんご

をとり出し、団扇であおいで艶

を出しました。

3、刺した木

酒匂川の河原のねこ柳を使い

ました。大きいだんごは、太い

幹の一番上に刺しました。あち

こちに、いろんな形のだんごを

色をちりばめてならしてゆきま

した。子どもも喜んで手伝いま

した。

大神宮さん、年神さん、お荒

神さん、お稲荷さん、山の神さ

ん、恵比須さん、大黒さん、仏

さんに、小枝のだんごを供えま

した。

数馬キクエさん(天正九年生まれ)

フクさん曰く「作ったものは、

私よりキクエさんがうまいの

で、お願いしたら」があつて、

写真の作品が実現しました。

「家も大体同じようでした。年

寄りから教わったことがなく、

見よう見まねで、自分で考えて

作ってきた「キクエさんでした。

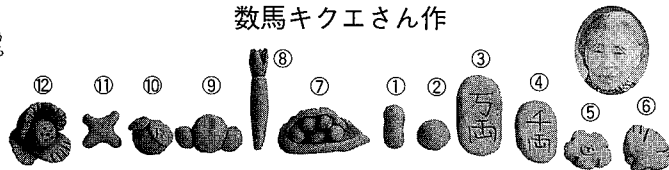
○作ってきたもの

大玉は作ってきませんでした。

普通のだんごや、いろんなもの

を作りました。

数馬キクエさん作



まゆ玉①、普

通のだんご②、

大判③、小判④、

綿の花⑤、鳥⑥、

宝船(俵七俵)

⑦、大根⑧、里

いも⑨、梨⑩、

小鳥⑪、椿の花

⑫

長年作ってき

た物を中心に作

り、ことしもよ

く実り、くらし

よくなるように、

心をこめて作り

ました。鳥は食

べにくる姿がか

わいので作っ

てみました。

家を守つてくださる神さま

(大神宮さん、年神さん、荒神さん、

恵比須さん、お稲荷さん)や仏さん

にも、小枝のだんごを供えて、

よい年をお願いしました。

二、山つき

○久野地区

星野尚子さん

(明治四十二年生まれ)

1、使った粉IIお正月なので

さなごはやめて、特別に白米の

粉を使いました。寒ざらしの米

を、石臼でひいて粉にしました。

石臼に入れ方が多いと荒い粉が、

少ないと細かい粉が出てきます

が、時間がかかります。三升の

星野尚子さん作



① 凹みをつけて作りました。かぼちや⑦、綿の花⑧、人参⑨、大根⑩、里いも⑪⑫、いんげん⑬など、たくさん作ってゆきました。

② 神棚にあげる小枝にも、だんごをならしました。特に恵比須

米は、少しふえて減ることはなかったです。

木鉢の粉にお湯を入れてこねましたが、いい練り具合は勘でした。そば粉のこね方は耳たぶの柔らかさでしたが、だんごの時は手加減の勘でした。

2、作ったもの
色は、赤・白・緑の三色を使いました。

一番先に、ダイシ(大きい)だんご①を作りました。普通のだんごを十二個(二めぐり・一年分)を一つにして作りあげました。

③は赤です。大判・小判④、緑の粉で「千」の字を作ってみました。宝船⑤には、三俵の俵をのせました。まゆ玉⑥は、少し凹みをつけて作りました。

瀬戸アサ子さん

(明治三十九年生まれ)

1、使った粉Ⅱ寒ざらしの白米を、製粉所で粉にしてもらいました。家のさなごだと、どす黒くなるので、だんごむしには使いませんでした。五升の粉で作って、賑やかにならせました。

木鉢で練るかげんは、耳たぶの柔らかさが目安でした。

2、作ったもの
赤・白・緑・黄の四色を使っ

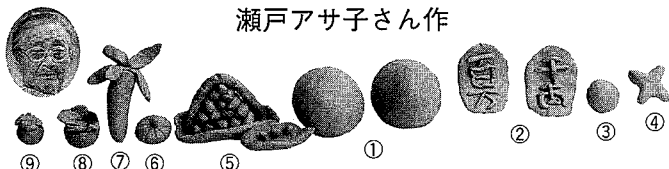
さんには、大判小判をたくさんつけて仕上げました。

作ったものは、蒸籠(せいろう)に入れてふかしましたが、だんごの色あいを見て判断しました。だんご同志のくつつきを止めるのに、水をパラパラとふりかけました。蒸籠から取り出して、団扇であおぐと艶が出ました。

3、刺した木
まき山から採ってきたこならの木に、だんごをならしてゆきます。一番先に、ダイシのだんごを、真中の頑固な幹の一番上にさしました。だんごの主、家主の主ということでした。

あとは適当に、色とりどりにいろんな形のだんごを、見映えよくさしこんでいきました。はじめ見た写真のような、見事なだんごむしに仕上げていきました。

瀬戸アサ子さん作



た葉や、赤い粉を使ったひも・字をつけて色とりどりに、きれいに仕上げてゆきました。子どもたちも、喜んで作りました。ふかし方はみなさんと同じで、やはり団扇であおいで艶を出しました。

3、刺した木Ⅱこなら。子どもも一緒にならして楽しみました。大玉は一番最初に、丈夫な幹の一番上にさしました。これを「親だんご」といって、子どもは食べてはいけないう慣になつていました。

五升分の粉を使ったので、賑

たが、赤や白を多く作りました。大玉①は赤と白の二個を作り、普通のだんご③は多くこしらえました。大判・小判②の字は、赤い粉で作りました。④は綿の花です。宝船⑤に、たくさんの米俵をのせて、ことしの豊作を祈りました。⑥はかぼちや⑦は大根、⑧は柿、⑨はなすです。

緑の粉を使った

片野千代子さん作



赤と白の普通のだんご①が、主でした。大判・小判②も、つけ加えて作りました。子どもたちも参加して、世代間交流のよき場となりました。今では公民館活動の一つに発展して、地域のふれあい活動として親しまれています。荒久の方も盛んでした。

やかで華やかなだんごむしとなつて、小正月をもちあげました。

小枝のだんごは、大神宮さん、年神さん、荒神さん、仏さんに供えました。

三、町中
○本町地区
片野千代子さん(天正十年生まれ)
1、使った粉Ⅱ上糝粉五合ぐらいつかつて作りましたが、やはり耳たぶの柔らかさにこねました。蒸籠二段でふかしました。団扇であおいで艶を出しました。

2、作ったもの
隣近所五軒まとまって、一軒の家に集まり、自分の家の分を作りしました。

酒匂村歴代村長

	氏名	在任期間	
代理	椎野 栄金	(明治)年 月 月 M25・2~6	4ヶ月
初代	川瀬 市右衛門	25・6~31・6	6年
2代	鈴木 重一	31・6~11	5ヶ月
3代	川辺 正之助	31・11~32・5	6ヶ月
代理	柳下 利五衛門	32・5~9	4ヶ月
4代	本山 純信	32・9~34・7	1年11ヶ月
5代	二見 松太郎	34・7~36・5	1年10ヶ月
6代	川瀬 豊蔵	36・5~39・4	2年11ヶ月
代理	日比野 政五郎	39・4~12	8ヶ月
7代	金子 豊蔵	39・12~44・10	4年10ヶ月
代理	神保 久蔵	44・10~45・1	4ヶ月
8代	松島 莊次郎	45・1~T8・7 (大正)	7年5ヶ月
9代	小島 栄太郎	T8・8~14・10	6年2ヶ月
10代	小関 喜雄	15・4~S3・5 (昭和)	2年1ヶ月
職務管理	斉藤 道全	S3・5~6	1ヶ月
11代	綾部 柳蔵	3・6~7	1ヶ月
12代	鈴木 徳次郎	5・6~13・6	8年
13代	原 吉太郎	13・6~15・1	1年8ヶ月
14代	剣持 富太郎	15・2~12	10ヶ月

◎昭和15年12月20日 網一色、山王原、小田原市に合併

15代	鈴木 徳次郎	S16・12~17・3	3ヶ月
-----	--------	-------------	-----

◎昭和17年4月1日 酒匂町となる 歴代町長

初代	鈴木 徳次郎	S17・4~20・12	3年9ヶ月
2代	川辺 武之助	21・1~22・4	1年3ヶ月
3代	星崎 善吉	22・4~9	6ヶ月
4代	堀口 浦吉	22・11~29・11	7年

◎昭和29年12月1日 小田原市に合併される

★村長不在期間？

昭和三十九年(二六〇)酒匂地区は果木はなく、水田も少なかったため、店舗を作ってもらったことを

初代 川瀬 周三
 二代 山口 忠蔵
 三代 内田伊佐夫
 四代 川瀬 慶造
 三十年五月、

明治二十二年(二八〇)全国に市町村制が施行され、酒匂村、小八幡村、網一色村が合併して酒匂村となった。(前号述)。

昭和十五年(二九〇)十二月二十日、網一色、山王原が小田原市に合併され、昭和十七年(二九二)四月一日、酒匂町となるが、昭和二十年代に入ると、

昭和十年代(二八〇)酒匂村に生糸・製茶販売などの共同組合が発足し、

昭和二十二年(二九二)一月十九日、農業共同組合法が公布され、農業会は解散し、昭和二十三年(二九三)酒匂農業共同組合が発足した。組合長は、

昭和二十二年(二九二)三月六日公布、九月一日(実行)。

酒匂史談 ⑫

川瀬 速雄

3、刺した木
 だんごの木を売りに来たおばあさん(早川地区から来た花売り)から買い求めました。それぞれ自分の家の分を、きれいに仕上げてあげました。小枝のだんごを、大神宮さん、年神さん、荒神さん、お稲荷さん、仏さんに供えて、共に味わっていただきました。

久野地区二人のいう「だんごむし」は、話している中で自然に出たことばで偶然です。伝承されたことばのように思いました。「だんご蒸し」か「だんご串の転化か」「他にあるのか」迷います。

ききました。共通現象(作品や耳たぶの柔らかさなど)がみられて、伝播の影響を思っています。栢山・成田地区のさなご利用に過剰のさなごの一処理法を思い、久野地区の白米利用に、神への供物(神饌)としての特別扱いを思いました。多様にして、繊細な細工物は、作者の淳い思いがこもっている趣でした。

まゆ玉行事(予祝)に、農村の風俗を連想します。けれど町中にも小規模ながら立派に営まれ、小正月を祝っていました。受けついでいく姿に拍手します。普通のだんごが多いという今のまゆ玉風情に、以前はこんなものを作ってた飾ったことを伝えたくてみました。(石綿 勉)

和二十九年(二九二)十一月一日、小田原市に合併された。この間の歴代村長、町長は左記の通りである。

肥料や農業資材の共同購入を目的とした農村購買組合が各地で誕生した。明治三十三年(二九〇)二月二十二日、これら共同組合誕生にかんがみ、農業団体法が制定された。

昭和十八年(二九三)二月、農業団体法が制定され、各農業団体(農会、産業組合、養蚕組合、畜産組合、茶業組合等)が統合され、農業会が発足した。

条件に小田原農業共同組合と合併し、翌四十年一月、酒匂支店事務所が新築落成し、昭和五十年二月五日、五月二十六日、店舗を改装し、Aコープ酒匂店として食品のスーパーを開始した。

⑩明治二十六年(二八三三)国府津、小田原間の馬車鉄道が電気鉄道になるのを、人力車夫、馬力夫等が、営業妨害だと村長宅、村議会に抗議、大騒動になった。

⑪明治三十五年(二九〇三)九月二十八日、大海嘯が小田原海岸を直撃した。(189号酒匂史談参照)

⑫明治三十八年(二九五五)、酒匂村一帯の耕地整理が行われた。

7 現代

足柄工場協会 酒匂村会員

評議員

山王原 鳥居鉄工の鳥居福松
網一色 剣持玩具の剣持伴三郎

会員

酒匂 原度器の原吉太郎
酒匂 堀口度器の堀口浦吉
酒匂 小八幡 小八幡冷蔵の小宮条蔵
酒匂 川瀬度器の川瀬正一
小八幡 和田玩具の和田久治
網一色 井上麻糸の和田舜三

網一色 野口鉄工の野口堅治
山王原 丸島製材の諸星島太郎
山王原 小蔦製革の小蔦幸之助
山王原 大沢製綿の大津喜三郎
山王原 神保挽物の神保義三郎
山王原 黒沢鳴物の黒沢由蔵

が足柄工場協会に加入していた。

①大正九年(二九〇〇)、国府津、幸町間の電気鉄道が廃止された。

②大正十二年(二九三三)九月一日、関東大震災発生。

「サカワ川仮橋流失、交通杜絶、鉄道橋ハ歩行丈ニセリ」(九月十五日会報)

「サカワ川渡船本日ヨリ開始」(九月二十一日調査、回報セリ)」

小田原町周辺の災害と前後処理報告の中に酒匂川について右の様な記述がある。

③昭和五年(二九三〇)十二月、足柄工場協会が発足した。目的は工場法規の研究と工場管理の改善、会員相互の親睦をはかるためで、会長に小田原警察署長が推された。

④昭和十五年(二九四〇)十

二月、網一色、山王原、小田原市に合併。

⑤昭和十六年(二九四一)、大蔵省印刷局酒匂工場設立。

⑥昭和十七年(二九四二)、酒匂村は酒匂町となる。

⑦昭和二十六年(二九五一)十二月、足柄下東部地区農業改良発展のため農業協議会が発足した。『酒匂町史』

⑧昭和二十九年(二九五四)と昭和三十五年(二九六〇)、酒匂町は大蔵省印刷局の従業員増加及び地区の住民増加に伴い、鴨宮駅南口改札口設置の陳情を行った。後、鴨宮駅には跨線橋が出来、南北の通り抜けが出来ようようになった。『酒匂町史』

⑨昭和二十九年(二九五四)、酒匂町は小田原市に合併された。

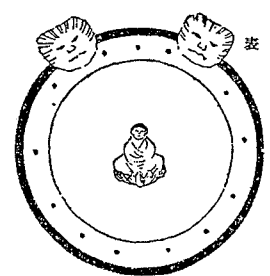
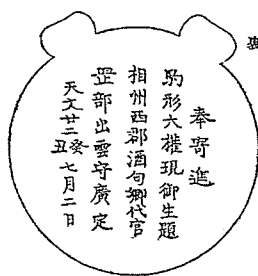
⑩昭和六十三年(二九八八)、保健センターが出来た。

⑪昭和六十五年(一九九〇)、福祉センター「いそしぎ」が出来た。

⑫酒匂町は昭和三十年頃より急速に発展し、みるみるうちに水田は埋められ住宅が建てられ、これに伴って道路は拡張、新設され、集会所等諸設備も整えられた。

十六 神社

1、『新編相模風土記稿』に、駒形社、村の鎮守なり。祭神鷓鴣茅草不合尊。木立像長二尺、又当社御生題と(按ずるに正体の誤なるべし)、号して、銅鏡面に像を鑄出せしものを、別当寺に置。天文二十二年(二五五三)岡部出雲守廣定の寄附する所なり。同時小島佐衛門太郎正吉も又生題二面を寄附す。これ中古失へり。村民徳右衛門家乘に、其銘の寫しあり、奉寄進駒形大権現御生題、相州西郡酒匂郷檀那小島左衛門太郎正吉、天文二十二年(二五五三)、癸丑七月二日、徳右衛門は即正吉が裔なり、と書



駒形社 銅鏡

かれている。

『北條役帳』には、幻庵内室の知行中に、四十貫二百五十文酒匂内駒形分と見ゆ、則当社の事なり。本地十一面観音(別当地の本尊是なり)例祭七月七日、当社及八幡の神輿をかつぎて村中を巡行す。とある。

2、年代不詳。将軍(鎌倉幕府)箱根権現参詣の時、酒匂駒形社、小田原松原社に、神馬を奉った。『箱根権現参詣、遷宮目錄』(つづく)

「高野山」参詣の記

小野 意雄

去る十月二十五日から二十七日にかけて高野山へ京都の旅を駆け足でして来た。二十七日に京都・知恩院での法要を機会に、高野山に前一泊の参詣旅行をすることにしたのである。

高野参詣は、幼い頃からの夢だった。私の七代前になる改姓小野家初代が仏門に入り、彼の没後に高室院から文化五二八〇年七月十四日に入寂という通知とともに、彼の法名大阿闍梨敏応法印、手作りの釈迦像、座右の弘法大師坐像・三具足等が届けられたという伝承があったからである。

- こうした由縁を踏まえて、この高野山参詣には六つの目的(調査の手がかりを得る)があった。
- (一) 旧藩主大久保家の墓所参詣と管理寺院のこと
 - (二) 小田原北条氏の墓所参詣
 - (三) 大阿闍梨敏応法印のこと
 - (四) 高室院文書

「文化四年丁卯年五月十三日」付「北条家并家臣過去帳抜書」制作経緯

(五) 敏応が念持していた「弘

法大師像」へ椅子前面の左に「河原」、右「大師」押刻されているという特徴がある。

〔六〕「高室院 鐘楼之図」この図の鐘楼は現存していない。文化三年罹災以前の鐘楼か、文化十四年の復旧図か。

本稿の趣旨

この稿では、「(一)項」と「(二)項」に絞って、現地確認の次第を記述したい。「(三)項」以下については、日野西先生のご教示についてのみ触れておきたい。事前に、手元【資料一】から知り得たこと、分からなかったこと、現地で新たに入手した【資料二】と【資料三】の一部と現地踏査から確認できた状況について記すことにする。(資料/末尾記載)

高野山行きを計画、宿坊は初めから高室院と決めていた。同行は兄弟姉妹夫婦の十人。無事宿はとれたが、なんと行っても

一泊では時間的余裕がないことは、何年前かに高野山参詣した娘たちのはなしで分かっていた。そこで、短時間で参詣するために、墓所の位置を知人の有識者に確認したが、「うーん!?」とはつきりしたお答えは得られなかった。反って「帰って来たら、今後の手引きのために報告文をなにかに書け」とのこと。これが、この「参詣の記」の寄稿趣旨である。

日野西真定先生のご教示

出かける前に、日野西真定先生の電話によるご指導、著書、資料紹介を得られたこと。さらに「高野山に来られる二十五日には余り余裕はないが午後ならお会いしてよい」とのコメントもあり、午後四時頃のお約束を戴いたが、東名の工事で遅延し、到着の十七時半過ぎから一時間あまり、御供所奥の居室にお招き戴き、「弘法大師像」「三具足」についてもお話でき、資料ほかを戴いたことを深く感謝し特記しておきたい。妻美子と弟英郷も同席させて戴いた。

なお、【敏応】については、資料一③⑩⑪⑫および③⑦⑧⑨⑩では不十分と、資料三④⑤⑥のご紹介を戴き、資料三④⑦⑧は翌二十六日高野山大学で入手

させて戴いた。なお、資料三⑥は先生から戴いた。

日野西真定先生は現在、高野山・奥の院の【維那】役(三綱の一つ、御供所詰め)。先頃まで、高野山大学教授。「寒川町史」にも関与された碩学。大正十三年(一九二四年)の大連生まれ。七十八歳。大谷大学院修了。日本庶民信仰史を専攻。資料一⑤⑦、二③、三⑤⑥のほか「弘法大師信仰」、「民衆宗教史叢書」第十四巻監修(雄山閣)等、著書・論文多数。

【維那】役について、資料一

④は、「御供所」の項(七一、七二頁)で「今も年中、お大師さまの身の回りの世話をする僧がいる。奥の院維那という名の役僧で、御供所で毎朝5時に起き、御廟に炊きたてのご飯と野菜をそなえ、一時間のおつとめをする」と紹介している。資料一⑦(七三、七四頁)には先生が、さらに詳細な説明をされている。

先生から、朝六時から一時間半のお勤めと昼十二時から二回あるがと、朝のお勤めの行列と読経への参加を勧められた。一行十人の内八人が参加させて戴き、残り二人が高室院の朝のお勤めに参加させて戴いた。行列は御供所を出て、御廟橋を渡り、燈籠堂でのお勤め、御供所へ帰る往復。読経の途中、内陣

で聞いた朝の小鳥の轉りが印象的だった。

〔三項〕以下について、十二月以降ならいつでもいらつしやい、また高野山大学図書館も利用しなさいとのことで、その節のことをお願いした。

〔二〕大久保家の墓所

1、由緒

〔一〕資料一①「相中襟志」

(一〇四頁上) 載。

『紀州高野山覚澄院者

寛永年中本源院様御建立』

ここに「本源院様」とは、藩主／大久保忠職公で、「寛永年中」となると、祖父忠隣ツネナリの没年寛永五年以降になるが、寛永九年以前の武蔵騎西時代ではなく、寛永九(二六三)〜寛永十六(二六九)年の美濃加納時代か、寛永十六(二六九)〜慶安二(二六五)年の播磨明石時代に建立と思われる。

〔二〕現地の状況

墓所は、鳥居(結界を示す)、石垣(弥勒弥勒の浄土を示す四十九院)、中央に五輪塔(供養霊の依り代依り代高さ三米ほど)の構成で、かなりの広さがあり、また五輪塔の周囲に小さい墓碑もいくつもあったが、繁茂した草木に埋もれて、写真を撮るのが精一杯の状態、時間の関係もあり、

墓碑銘等の確認まで出来なかった。この次に参詣する時には、鎌・鉋・鋸等の伐採道具、倒れた石垣の補修用具・用品、そして五輪塔の大きさや墓所の広さ等の計測用具を予め準備した方がよいと思った。

墓所は、他の大名も同じ様な構成で、その意味等は資料一⑦の『墓塔の構成』(九七〜一〇七頁)に詳しい。

〔三〕位置の確認

ア、まず資料一⑦記載「南山奥之院諸大名石塔記」と資料二③の古絵図を照合、現況確認の上、構成された資料一⑦(二五六頁)(二六二頁)を引用してみたい。

(参道左方Ⅱ一之橋域)

大久保加賀守(譜)

十一万三千石

相模・小田原

覚證院(聖)

(参道左方Ⅱ中之橋域)

大久保加賀守(譜)

十一万三千石

相模・小田原

覚證院(聖)

三年の『石塔記』を基に作成されており、各大名家墓所の存廃も指摘されているが、大枠での位置は分る。

b、この資料で大事なことは、『覚澄院』は管理寺院であり、

墓所ではないことが明示されていることと、澄ではなく證であることである。

c、墓所が、「一之橋域」と「中之橋域」の二ヶ所になっている。確認の必要がある。

イ、資料二①

【高野山奥の院の墓碑をたずねて】

現在の墓碑の位置関係が、一番適切に明示されており、事前に入念におくとよい【墓所案内図】である。いわゆる模式図・イメージ図ではなく、縮尺表示はないが、きちつとした地図上に矢印入りで墓所がプロットされているから、他の墓所との位置関係もはっきり分る。特に、なによりも「町石」(約一〇九米毎に設置が表示されている。ちなみに高野山山内・参道もなだらかな平坦盆地だから、散策は遊歩感覚である。観光案内の「距離・時間」も、一分間で五〇米プラ・マイ五米だから、「これは誰それの」「あれは何家の」と観察しながらの散策が気軽に、この案内図に添って出来る。関係箇所を書割りした引用図を参考に後掲する。

写真の墓所は、「二三町石」から約五〇米先、左折れの小道(右に「総本山金剛峰寺高野山中之橋靈園」「スキー場 二〇〇米」の標識、左に「吉川家墓所参道」の標

石が立っている)を約十米登った右方にある。左方には、彦根井伊家供養塔がある。

もう一箇所の「中之橋域」の「大久保家供養塔」は、「二七町石」先を左折、久保田鉄工慰霊碑の奥にあるが、『武州江戸大久保家供養塔』となっている。

後日の確認課題である。なお近くに、『相模小田原藩稲葉正勝供養塔』があるので注記しておく。

〔四〕「覚澄院」の確認問題

「覚澄院」は墓所か管理寺院なのか。現在、高野山山内には、「覚澄院」という寺院は確認出来ない。廃寺になっている可能性が高い。つまり、管理寺院の建立か、墓所・墓碑等の建立か、この資料一①では読みとれない。「覚澄院者」の者は、『覚澄院募域にある墓所は』と読むべきではなからうか。

また、『相中襟志』は「覚澄院」としているが、資料一⑦は謄である。いずれが正しいか確認したい。

さらに、資料一⑦は「覚澄院」を聖方としている。高野山では、学侶方、行人方、聖方の三派の対立・争いが江戸時代には大変だったとされている。ちなみに、徳川家の「大徳院」は聖方であるが、「覚澄院」がどの派に属するのかが、確認したいと思った。

墓所の位置	参道の左方	目標の町石と他の大名墓所
一之橋～ 北条家墓所21 町石付近	付近・左右には 加賀大聖寺前田家 信州松本の水野家	一之橋(17町石)より400m8分右方21町石前の脇道 を左手に登り、奥まった墓所。右方には紀伊の徳川家、 多田満仲。
一之橋～ 大久保家墓所 23町石と 24町石の間	脇道の左右には 彦根の井伊家墓所 24町石より約30m先に 相模小田原稲葉家墓所	左方23町石から約50m、海軍整備訓練生慰霊碑、弘法 大師ごま石の手前の小道を左方に登り、右手にある。 参道右方には仙台伊達政宗、薩摩島津家。紀伊徳川家。 石田光成、明智光秀。
～ 中之橋 ～ 大久保家 北条家	左右27町石付近の左右奥に 武州江戸大久保家墓所あり 一番石崇源院殿付近にはない	中之橋手前際、市川団十郎供養塔隣の小田原北条家供 養塔は、遠州掛川北条家の墓所。

左表は現地確認と「高野山奥之
院の墓碑をたずねて」を参考に
まとめたものである。

(5)資料二②による「覚證院」
の確認

山口耕栄編著「高野山院跡考」
に拠って、管理寺院の存廃状況
や三派の帰属関係が分る。この
資料は百部の限定印刷で、高野
山大学図書館所蔵一冊のほかは
山口先生が関係各寺院等に寄贈
された貴重図書である。この度
は、高室院の斎藤住職のご好意
で、高室院所蔵本を一時貸出さ
せて戴けた。

そして、次のことが分った。

ア、「覚證院」は、「高室院」
と同じく「小田原谷」にあつ
たこと

イ、「覚證院」は、證であつ
て澄ではないこと

ウ、「覚證院」は、学侶方に
属し、聖方ではなかったこ
と

（○覚証院三八頁。学侶方四
〇頁）

エ、「覚證院」（一心院谷⇨移
転?）

「明治二十四年四月十五日
開届」により廃寺となり、

「光台院」（五之室谷）に合併
されたこと（一二二頁、一四
九頁）

【注記】今回、「光台院」には
直接の問い合わせ等はしていな
い。後日の確認としたい。

(二) 小田原北条氏並びに家臣
の墓地

1、資料／「昔間乃道」

この資料②は、小田原北条
氏墓所に顕彰碑「小田原北条氏
の興亡」を建立した特集号であ
る。

旅の手引きに活用したい立場
からすると、墓所の位置につい
ては、既知のこととしているの
か、それとも「行けば分る」、
「高室院に聞けば分る」という
ことなのか、全く紹介・記述し
ていない。少なくとも、町石で
の案内、「一之橋から何米・何分
位の処、参道際か、脇道に一寸
奥に入るとか、環境や周囲の状
況などにも触れて欲しかった。
随伴記でも。

2、南山奥之院諸大名石等記

資料一⑦の記事（二五三頁）

（参道左方⇨一之橋域）

北条相模守

（譜）一万石河内・狭山
高室院（学・上）

北条相模守

（譜）一万石河内・狭山
高室院（学・上）

3、奥の院の墓碑をたずねて

資料二①【案内図】に拠る現
地確認

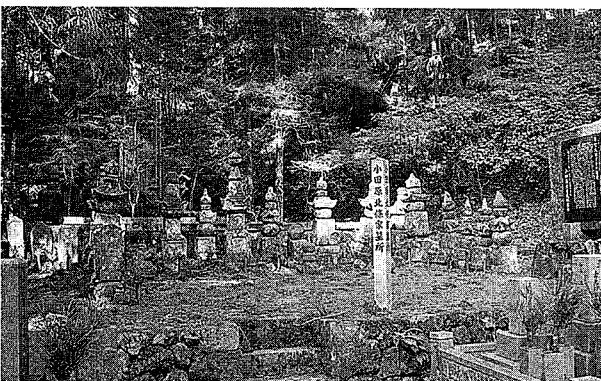
資料一⑦では「一之橋域」に、

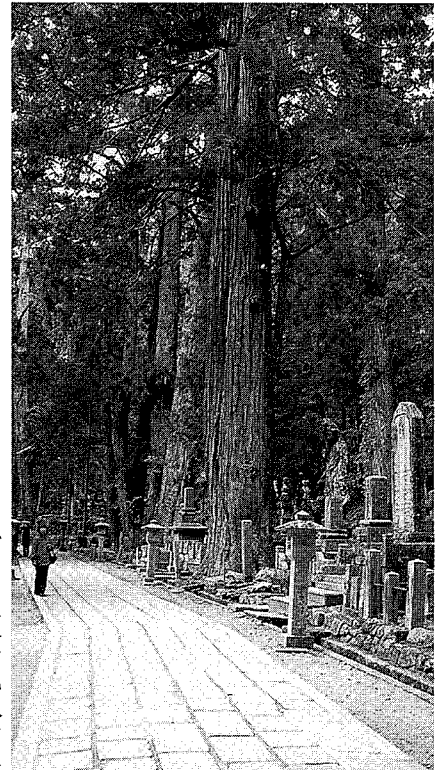
二ヶ所近接して表示されている
が、資料二①では、「二一町石」
先・左折れ入る処に一箇所（前
記の「顕彰碑」の建立地）、も
う一箇所は、かなり離れた「二
六町石」先、「中之橋」際に、
市川団十郎供養塔に隣接して五
輪塔が二基あるが此処か。
墓碑銘は確認していないが、
表示柱は「遠州掛川北条家墓
所」である。

なお、「一之橋」「一七町石」を
入り、「一八町石」先の左方奥に、
「曾我兄弟供養塔」がある。小
田原人としては見逃せない。

小田原北条氏の墓所

撮影／小野英郷





参道の杉並木

参考にした資料一覧

【資料一】事前の参考案内書・資料等

①相中襟志 仁・勇 三浦義方著
天保一二年頃。石井富之助
解題・校訂
(小田原市立図書館長)
神奈川叢書第五編 昭和
四二年刊

②芦間乃道 No.二七・二八号
昭和六十二年刊
北条氏綱生誕五百年記念号
立木望隆主宰郷土文化
研究会

③高野聖 五來 重著
角川書店 昭和五十年刊

④高野山へ、弘法大師ご入定
一一五〇年記念号
古矢著

⑤巡礼高野山
ナンバー出版一九八七年刊
永坂嘉光・日野西真定
・川又一英著
とんぼの本 新潮社
一九九〇年刊

⑥高野山
紫雲たなびく弘法大師の聖地
小学館ウィクリーブック
「古寺をゆく一五」
二〇〇一年刊

⑦高野山民俗誌「奥の院編」
日野西真定著
二〇〇一年刊

⑧INホームページ「高野山」
「高室院」
佼成出版社 一九九〇年刊

⑨仏教辞典 浩々洞著
無我山房 大正十三年刊

⑩密教辞典 全 佐和隆研編
法蔵館刊

⑪密教大辞典 密教学会
法蔵館刊

⑫日本仏教人名辞典 法蔵館刊

⑬北条早雲 杉山 博著
名著出版 昭和五十一年刊

⑭北条家過去帳 北条家系図
平塚市博物館市史編さん係編
昭和六十年刊

⑮謎の大寺 飛鳥 川原寺
網干善教・NHK取材班共著
日本放送協会
昭和五十七年刊

⑯飛鳥・藤原京展
奈良文化財研究所
創立五〇周年記念
二〇〇二年刊

【資料二】(一)項・(二)項 関連資料

①高野山奥の院の墓碑をたずねて
日野西真定監修 (百円)
高野山観光協会・高野山宿坊組合刊

Tel: 073615612616
Fax: 073615612889
②高野山院跡考
山口耕栄編著 (限定百部)
高野山大学

③高野山古絵図集成
日野西真定著
清栄社・タカラ・写真製版
昭和五十八年刊

【資料三】(三)項・(六)項 関連資料

④金剛峰寺諸院析負輯
弘法大師御生誕
一千二百年記念
続真言宗全書刊行会編纂
高野山大学内

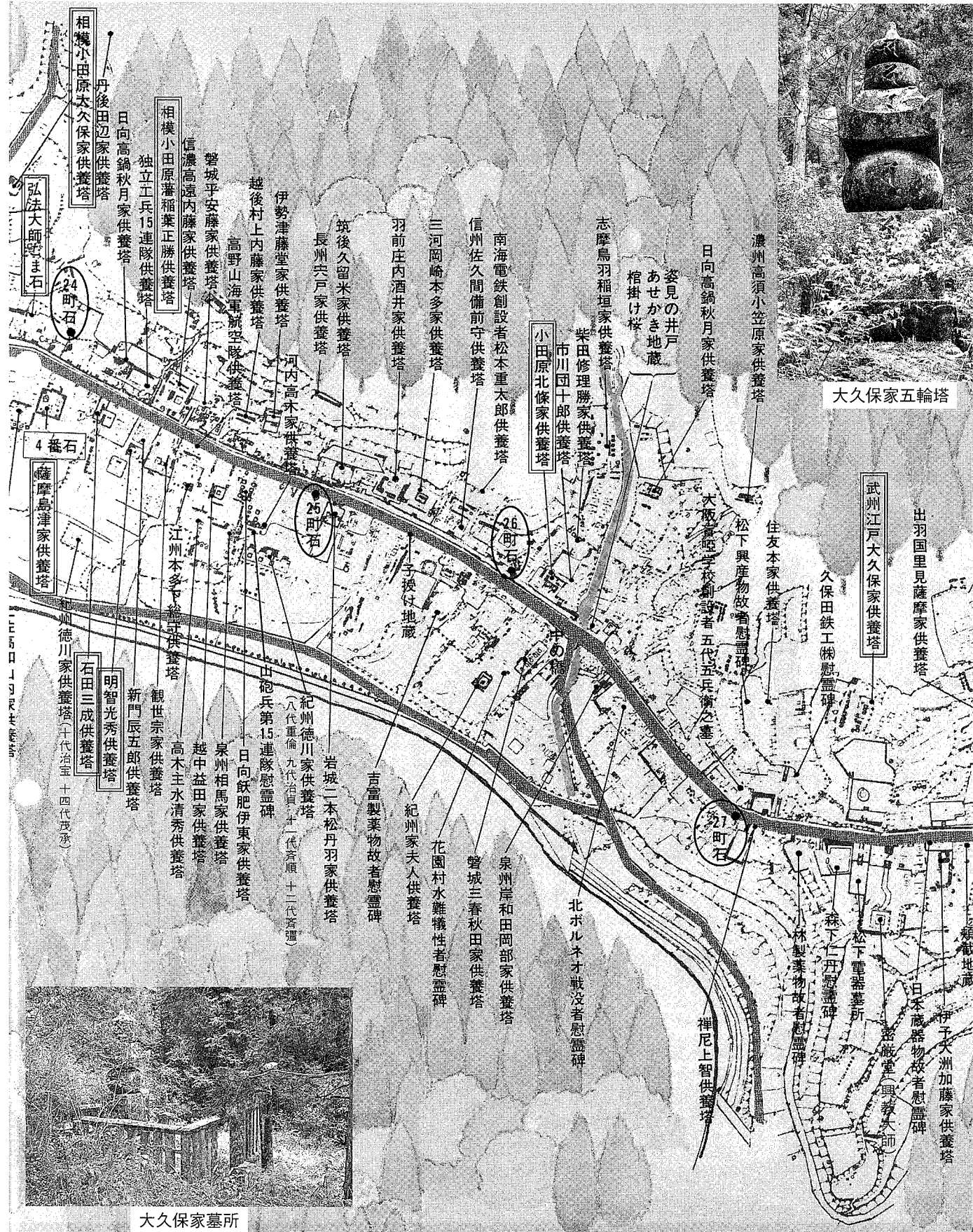
⑤新校高野山春秋編年輯録
日野西真定編集校訂
岩田書院
一九九八(二)九三年刊

⑥高野山四季の祈り
日野西真定・矢野建彦共著
佼成出版社
二〇〇二(二)九五 年刊

⑦真言宗全書 解題
弘法大師御遠忌
一千百年記念
同 刊行会
昭和十二年刊

⑧真言宗全書 索引
同 刊行会
昭和十四年刊

⑨真言宗全書第 三卷所収
「野沢血脈集」
真言宗全書第十三卷所収
「血脈類聚記」
「目録並解題」
同 刊行会
高野山大学内



大久保家五輪塔

武州江戸久保家供養塔

出羽国里見薩摩家供養塔

伊予大洲加藤家供養塔

日本産器物故者慰靈碑

密厳堂(興教大師)

松下電器墓所

森下仁丹慰靈碑

林製薬物故者慰靈碑

禅尼上智供養塔

北ボルネオ戦没者慰靈碑

泉州岸和田岡部家供養塔

菅城三春秋田家供養塔

花園村水難犠牲者慰靈碑

紀州家夫人供養塔

吉富製薬物故者慰靈碑

岩城二本松丹羽家供養塔

紀州徳川家供養塔

八代重倫 九代治昌 十代齊順 十二代齊禮

山砲兵第15連隊慰靈碑

日向鉄肥伊東家供養塔

泉州相馬家供養塔

越中益田家供養塔

高木主水清秀供養塔

観世宗家供養塔

新門辰五郎供養塔

明智光秀供養塔

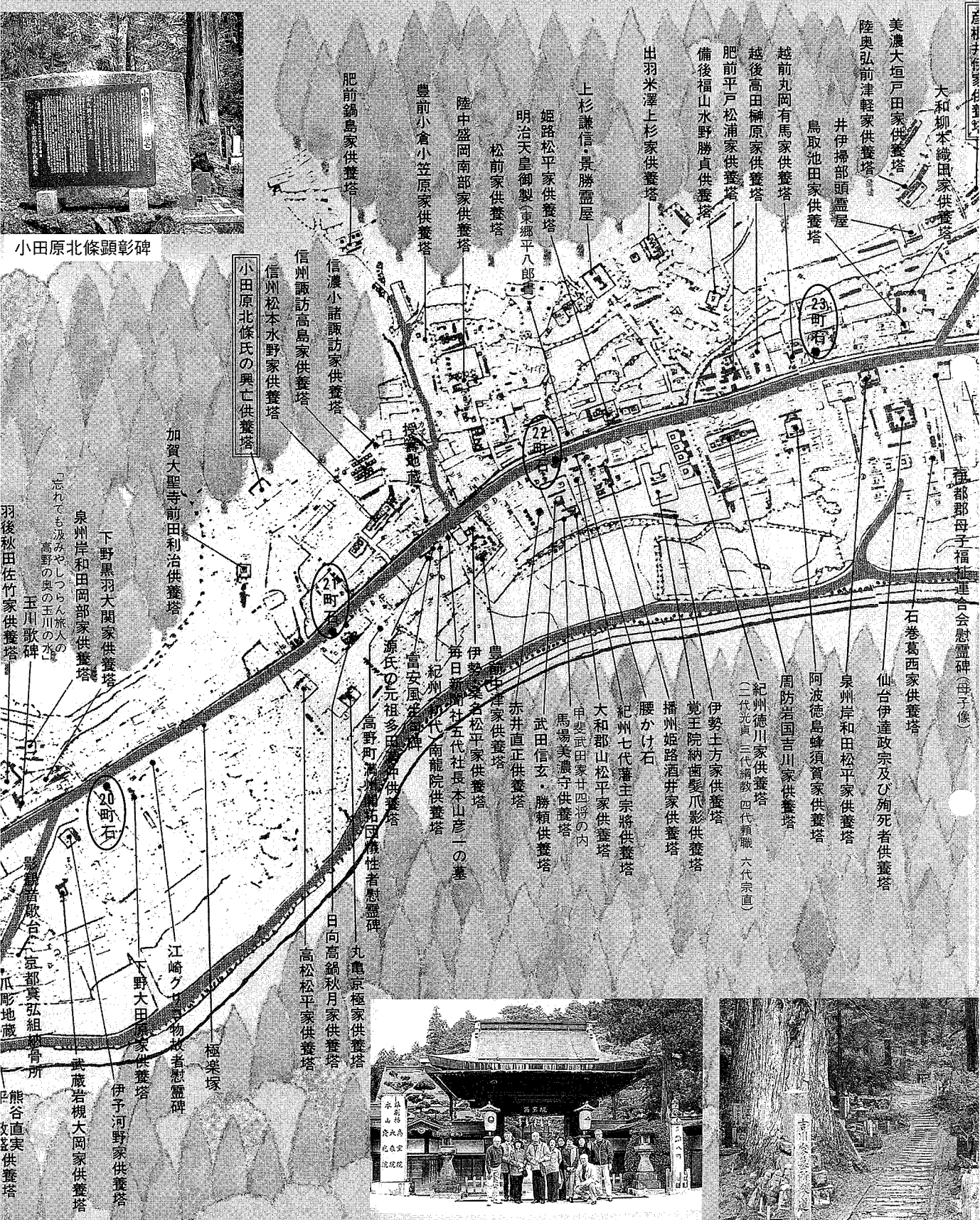
石田三成供養塔

徳川家供養塔(十代治宝 十四代茂承)

大久保家墓所



小田原北條頭彰碑



高室院の門前で



大久保家墓所入口

補遺 尾崎亮司 九

小田原城の変遷

(明治維新前後以降)

岡部忠夫

- ・「小田原保勝会略記」碑に関連して
- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ①～④ (No.一八四～一八八)
- ・小田原城内高校とかかわりある人びと ①～③ (No.一八九～九二)
- ・小田原城の変遷①
- (明治維新前後以降)
- (次号以下に掲載予定)
- ・小田原城の変遷②
- ・お濠立反対運動
- ・北村透谷碑について
- ・むすび

(以上本号)

小田原城の変遷①

藩主大久保 明治元年(一八六〇)九月二十七日、忠礼永蟄居 日、小田原藩主大久保忠礼は、戊辰戦争箱根の戦いで一時佐幕に変わり軍監を殺害したかどで維新政府より永蟄居を命じられた。

ことの起こりは、慶応四年(一八六七)閏四月十二日、上総国請西藩青年藩主林昌之助忠崇(一万石)及び旧幕府陸軍の遊撃隊脱走隊士伊庭八郎と人見勝太郎の二人が、手勢約六百名を率い船二艘に分乗、館山を出発して伊豆国網代(熱海市)に向かう予定のところ、風波が強く真鶴に上陸することになった。

林は家臣を従え、藩主大久保忠礼に会う予定で小田原城下に入った。徳川家支援のため小田原藩を揺さぶり奮起を促すためであった。

しかし、筒先を官軍に向けたら徳川家の

安泰にならないと、藩論は尊皇で態度が決まっていたので、忠礼は家老に応待させた。生ぬるいと見た林らは伊豆・駿河・甲斐に同志を糾合しようとしたが、思うようにはいかなかった。

一方、遊撃隊の行動に刺激されたか小田原藩では軍議が開かれ、藩論は強硬派により引つ練り返され、佐幕派に組することに決まったのは、五月二十日であった。

藩主大久保忠礼は高松城主松平頼胤の弟で、小田原城主大久保忠愨の死去と共に養子になって遺領を継いだ人で、小田原藩生え抜きではない。その点強硬派を抑えきることが出来なかったかも知れない。

箱根関所で小田原 一方、遊撃隊は近藤藩、遊撃隊と和睦 勇の率いる甲陽鎮撫隊が甲州勝沼で敗れたのを知っていたはずである。また、五月十五日上野での彰義隊壊滅の報がもたらされたのであろう。ともかく、戦局の不利を挽回すべく、五月十九日、香貫(沼津市)を出発し、早くも箱根宿を占拠した。

これより先に箱根関所は守備を増強し、隊長吉野大炊介、早川矢柄が率いる小銃隊四小隊、山野砲隊半隊からなる将兵で警護を固めていたが、二十日、小田原藩兵は湖畔から遊撃隊の陣営を砲撃した。

一方、小田原藩の家老渡辺了叟の命をうけた用人関小左衛門は、深夜、漆黒闇夜の

箱根を馬でとばし、藩論が勤皇から佐藩へ変わった、これからは遊撃隊と和睦し、ともに徳川家の冤罪を晴らそうと藩命を伝え、休戦させ遊撃隊を関内に入れた。

軍監の これを知らずに軍情視察に小田原 殺害 原からきた軍監中井範五郎は、芦ノ湖畔の権現坂で待ち構えていた遊撃隊に殺害された。軍監吉井堅造は変装して逃れたが、山角町見付(小田原市城山四丁目)で変装がばれ、番士に斬られた。

この異変を小田原宿にいた三雲軍監に急報する者がいた。藩論に反すると知っていたうえのことであろう。三雲軍監は従者二名と共に江戸に逃れた。

考えてみると小田原の地は気候温暖のためか、住民は温和な気質を持っている。それなのに小田原藩を監督する東征軍の軍監を殺害するなどのことを為出かしている。幕藩体制の組織の中で醸成された気質と云うよりは、戦場という殺気だった特殊な雰囲気と兵士の勇み肌、軍監をあやめるに至ったと云うより他はない。

中垣秀実天下 江戸・芝の藩邸詰めの中の形勢を説く 垣秀実は、五月二十三日、とり急ぎ帰城、天下の形勢を説いた。中垣は中級のクラスに属す。平時ならば、とても主君の前で天下国家を論ずる訳にはいかない。祿高による秩序規律があった筈。藩が危急存亡にあるとき、それがはじめて可能であったと考えられる。それに藩主は温厚実直の人柄と思われる。中垣の意見を黙って聞いていたのであろう。また、藩主は、中垣の諫言が強硬派の家老渡辺了叟を押さえるには好都合であったと思われ、東征軍に謝罪降伏し遊撃隊を城下より撤退さ

せることになった。

伊庭八郎らは藩論の軟弱に憤り、箱根・山崎の戦いとなる。小田原藩兵は、東征軍の督戦のもと、遊撃隊を攻撃した。遊撃隊には脱走した小田原藩士がいる。かつての同志が相討つことにもなるが、ながくなるので機会を得て記したい。

藩主忠礼は大工町・本源寺(小田原市栄町四丁目。大久保氏内庵の一つ)に謹慎して恭順の意をあらわした。九月二十七日、藩主大久保忠礼は維新政府より永蟄居を命じられた。なお、渡辺了叟は切腹、吉野大炊介、関小左衛門は謹慎を命じられた。

足柄下郡長になった関重磨は、関小左衛門の長男である。

大久保忠良 十月二日、七万五千石に減家督を相続。らされた大久保家の家を、分家荻野山中藩保教義の長男岩丸(大久保忠良)が継いだ。ときに十一歳。

明治二年六月十八日、政府、版籍奉還を小田原藩主に示達、十九日、藩主大久保忠良が小田原藩知事に任命された。また、諸藩の版籍奉還を許すと同時に二百六十二人の旧藩主をそれぞれ藩知事に任命し、ことごとくを華族とした。

註 華族 明治二年六月、諸侯の称が廃され(公卿も同じ扱い)、代わって華族の語が用いられた。翌三年十二月、官家・華族・旧官人は俸祿が与えられ、十七年(一八四)七月になると華族に公・侯・伯・子・男の爵位が定められ、世襲となった。二十二年に発布された大日本帝国憲法(明治憲法)と同時に貴族院令が公布され、貴族院の構成員と

して満三十歳に達した公・侯爵の全員、伯・子・男爵は同爵の互選により貴族院議員となることが定められ、天皇家の藩邸の役割を担っていた。しかし、このような特権階級の存在は好ましくないと敗戦後、日本国憲法成立とともに廃止された。

余談であるが、華族に爵位が与えられるようになってからのことである。大久保家は子爵の称号が与えられた。ところが、大久保家の子爵は他の旧藩と同じ石高に比較すると低いと、昇爵の陳情を小田原に別荘を持つさる高官を通じてするが、伯爵に昇進することは出来なかつた。戊辰戦争で一時的、東征軍に背いたのが祟ったわけで、いま考えると馬鹿ばかしい話であるが、当時は昇爵が真剣に考えられていたのである。

小田原城 明治三年閏十月十二日、小田原城 原藩知事は政府の旧城廓の破却方針に従い、小田原城廓は藩の力では到底修理が出来ないと大久保藩事よりの申し出により、二十日、政府はこれを許可し、小田原城は廃城となり、大久保元知事は杉浦邸に移った。

城の天守と棟五棟等は九百両で売り渡すことに決定。天守の鯨は、五、六尺の銅製で天文九年(一六三二)のがあった、と倉橋浜吉という老人が確言しているが、年代は小田原北條氏(氏政)が支配した時代であり、江戸時代にこのような構造があつたかどうか疑問を、片岡永左衛門は投げかけている。また、大久保家では刀剣、書画、茶器、能楽の装束、その他大小の諸道具、武器及び諸建物等の競売を毎日行った。先祖伝来

の物を売り立てするとは、余程の事情があつたのであろう。現在、大久保家の武具、装束、什器備品など見るべきものがないのも頷ける。それにしても、小田原藩が如何に疲弊していたかを物語るものである。

註 かたおか・えいざえもん

(一八六〇—一九四三) 小田原本陣片岡家(現・本町三十一—二十現オリオン座)に生まれる。蝶堂と号した。旅籠を廃業、緑町に移った(現・小田原駅前弁財天、新名学園前)。明治三十三年小田原町助役に就任、三十五年の大津波に当たっては町長代理助役として、その救済、復興に努力、堤防造成に骨折る。三十五年設立の小田原教育会初代会長、足柄下郡教育委員会、小田原町学務委員を歴任。小田原町立高等女学校の設立、小田原町図書館の設置に大きな業績を残す。また郷土史に関心をもち多くの著作をのこしているが、『明治小田原町誌』が白眉。歌人でもあり、関東大地震にまつわる歌が詠進歌で入選した。また、蜜柑園経営の先駆者としての榮譽を持つ。それに、関東興信銀行支店長として関東大地震後、老艦に鞭打ち、貸付金の回収に骨折る。藤沢銀行監査役に就任。また、陶宮術の師範としても活躍した。

陶宮術 人はその生年月日の干支や人相・骨相に応じて宿命を負っているが、日頃の訓練によってその宿命を克服し運勢を切り開くことが出来るという教義で、天保五年(一八三四)に横山丸三が創始した。

(つづく)

小田原の郷土史再発見

三嶋曆・相模国の弘曆網(二)

小田原に曆会所があつた

二、三嶋曆師河合家と

手代横野村今井家

小田原北条氏が採用した三嶋曆は、江戸時代は三島の曆師河合家が伊豆国へ、大住郡横野村で同家の手代を勤めた今井家から、相模国に頒曆されていた。

1、三嶋曆師河合家

三嶋曆と同様に、三嶋曆師河合家の起源も奥は深い。

「増訂豆州志稿」三嶋曆の条によると、河合家の祖は四十九代光仁天皇(七七一)の宝龜年間、山城国加茂より三島明神を勧請し豆州三島に下った者である。その末裔の河合氏が、代々曆を版行してきたが、何年頃から始まったかは判明していない。

河合家は、「仮名曆ばかりではなく具注曆をも自家で編纂し、版刻した形跡がある。京都陰陽寮で作られた具注曆は手写で、版曆ではない筈。しかし、金沢文庫所蔵の具注曆断簡は、版曆で文保元年(一二三七)作成と推定されている。当時、鎌倉の執権

石井啓文

北条氏は、京の朝廷に対抗して三嶋曆師に具注曆を作らせ、開版させていたことが考えられる」という説もある。

河合家は、三島神社領内に六百坪の宅地を構え、曆宮として社宮「司明神」を奉つていた。宝曆三年(一七五三)一月二十四日、

土御門家の家司広庭図書が関東へ御被献上のとき、三島宿に泊まり河合玄隆に問い糾した記録には、「以前は伊豆一國に販売していたが、今は伊豆・相模兩國へ売り広めている。しかし、生計は苦しく医者を兼業している」とある。

同五年(一七五五)十一月六日、河合玄隆名代が天文方に差出した書付は、次のように記している。

「貞亨改曆(二六四)以前は自家で作曆していたが、改曆後、諸國の曆本が統一されてからは、写本曆を出版して寺社奉行から貰い受け版刻してきた。その後、江戸出府も不如意となり、三島代官を介して原本を受け取るこ

の津村淳庵著「譚海」は、「三嶋(ごよみ)は、伊豆相模の二ヶ國に商ふ事免許なり、曆師河合龍節という者、毎年歳暮に江戸へ罷出、公儀と御三家へこよみを奉り、目録を拝領して帰國する事定りたる事也」と記している。

2、大住郡横野村

横野村は、秦野盆地の北西部、丹沢山中烏尾山の南西に延びる尾根の南にある山付きの村である。村の中央を北西から南東に十日市場道が通る。

新編相模国風土記稿は、中世に村の起立を窺わせ、近世初頭は幕府直轄領とある。慶長十四年(一六〇九)、一部が旗本小栗領となり、寛永元年(一六二四)残りが旗本戸田領となる。

元文五年(一七四六)、再び幕府直轄領に復し、文政十一年(一八二八)以降、小田原領となる。

延享元年(一七九四)十二月の村明細帳によると、年貢は大磯浦まで四里半、馬で送った。買利物は万事十日市場と小田原にて調える。農間余業に薪を伐り、十日市場の他、塩海・梅沢(現中郡二宮町)まで馬で運んで売った。

家数六五。人数三四七。大工一、木挽二。馬三九。

小田原領後の文政十二年(一八二〇)明細帳は、家数六四。人数二

七三。馬三四。家数は一軒の減少であるが、人数は74人も減っている。村の疲弊が窺われる。

3、横野村今井家

秦野市横野の今井高保家に伝わる文書に、横野村伽羅子神社の縁起がある。

「日本武尊が塔ヶ岳を通ったとき、御衣を砥石として宝剣を磨いたことから、この山を砥山と名付けた。そして、源頼朝に滅ぼされた木曾義仲の一族である今井兵部なる者が、この山に身を隠し主人の敵なる頼朝を狙っていたところ、カラコダ明神の靈力をもつて横野郷の井沢小六に説得され、その野心を捨てた」と所謂、地名の由来説である。

「横あいの野心をやめ、拙者に同心してこの靈神を信心せんや。兵部聞きて、しからばそのもとに従いて信心すべしと。すでに同道してかの社に詣で、これより二人この所に会心して居住す。これによって、当村を呼びて横野郷と名付くることは、悪逆をとめ信を起すと論ず。故にこの深山に靈神のまします証拠、末世に戒めて郷に名付くるという云々」

この今井兵部は、江戸時代末期に同村組頭を勤めた安右衛門の先祖で、鎮守の唐子神社を勧請して以来、代々鍵取を務めて

いる。天正十九年(二五二)、子孫の郷左衛門利広が、徳川家康に同明神の由緒を言上して朱印を賜わっている(相中留恩記略)。

三嶋曆師河合家の手代を勤めた今井源左衛門(現士朗)家も、元を辿れば一族であろう。天明六年(二七五)から寛政元年(二七九)頃の名主跡役騒動の際は、源左衛門が村百姓57人の総代を勤めている。現代まで今井家に残された多数の文書からも、名主格の旧家であることが窺える。

三、相模国の弘曆網

今井家所蔵二十二点(一点追加)の三嶋曆に関する文書を中心に、相模国での三嶋曆の弘曆網(販売組織)を探ってみた。

1、伊豆・相模両国への弘曆

元文四年(二七三)九月付文書は、「三嶋曆の伊豆・相模両国への配布に関する達し(写し)」である。三嶋曆の販売範囲を、伊豆・相模両国に定めることを再確認している。

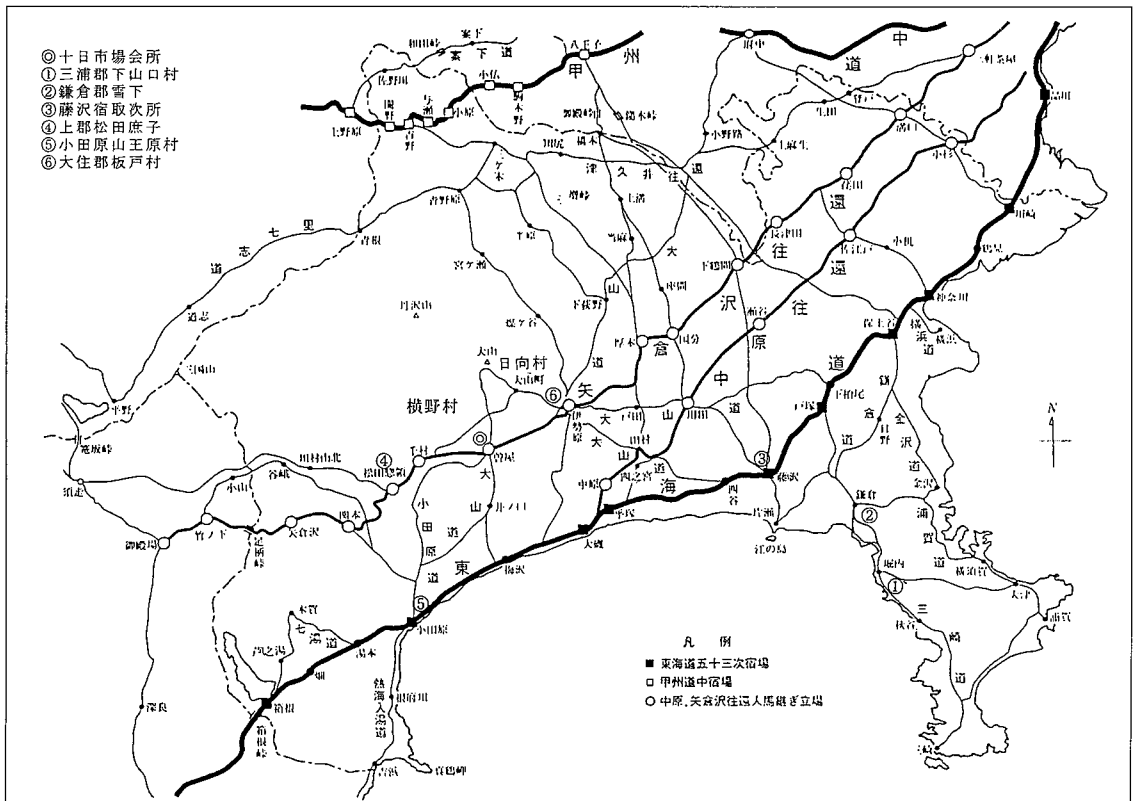
伊勢御師が伊勢詣りを宣伝し、誘う手土産に伊勢曆を配布するため、三嶋曆の販売が圧迫されるといふ三嶋曆師河合元隆よりの訴えが、松平左近將監(前寺社奉行の時であろう)にあった。このため、元文四年より両国で

は外曆の持ち込みを禁じ、伊勢山田奉行所へも通達した大岡越前守忠相(現寺社奉行)の達しを、勘定所を通して代官齋藤喜六郎が受け取り各村に通知、村では承知の旨の請書を提出するのである。

次いで、寛政三年(二七九)十一月と十二月付の「一札之事」は、元文四年(二七三)に伊豆・相模両国に他曆の持込みはできないことに定められたが、伊勢御師が進物に伊勢曆を配布しているのが見える。このため、毎年九月一・二日の内には曆版木を俵玄節に届けさせるので、三嶋曆を摺出し伊勢御師に販売し広めるよう達している。河合家の版木を受けた今井家で、曆の印刷を実施していたことが知れる。

曆は、市町での辻売りを禁じ、献上先に江戸城本丸と西の丸・老中・若年寄・寺社奉行、尾張家と福井家、それに大久保家と江川家を指定している。

差出人は、三嶋曆師河合龍節と親類成真寺、三島神社御師波多野彦太夫である。受取人の横野村今井源左衛門は、河合の手代(配下)で相模国の頒曆を請負っていたことが知れる。矢倉沢往還からも外れた山間にある横野村の今井家が、手代に任命され、版行をも実施していたのはどの様な理由であろうか。



三嶋曆・相模国の弘曆網

(かながわの古道「近世街道図」に加筆作成)

寛政三年(一七二一)二月付の「一札之事」四枚は、暦代銭は経費を差し引いた利益を河合家と折半する。その清算に、九月四・五日中に今井方に参る、とも記している。

2、相模国の暦会所

翌寛政四年一月付「暦員数并直(値)段附代金取継一札之事」は、三嶋暦の相模国での仕入代金と員数を記し、代金の決済方法も定めている。そして、暦の販売所として、十日市場会所と小田原の山王原村(現東町)湯川与七郎会所を明記している。

前者は、曾屋村(現秦野市曾屋)の中央、矢倉沢往還と平塚道の交差点付近を中心に、往還沿いに南北に設けられた市場が地名となり、曾屋村の別称としても用いられている。市は、従来から一(一日のみ二日)・六の六斎市であった。山王原村は、小田原府中に隣接し、東海道の江戸(山王)口を出た所にある。

差出人に、「龍大夫・久保倉大夫・龜田大夫其外共式拾貳人」とある。龜田大夫は、相模国担当の伊勢御師である(秦野市史)という。相模には二十五名の御師が来ていたことが窺える。

彼らは、この十日市場会所と湯川与七郎会所から三嶋暦を買入れていたことになり、暦代銭

金は、小田原山王湯川与七郎会所に届けるとしている。相模国第一の都市小田原に、常に御師が巡回していたことも窺える。

受取人は、「豆州三嶋御暦師河合龍節様御内今井源左衛門」とある。「御内」は親戚だろうか。暦師と手代関係の「身内」の意と思われるが…。今井家は三嶋暦師河合家と縁戚か、それとも特別な知己であったのだろうか。

「申合之事」は、伊勢御師に三嶋暦を販売し、進物にすることが約束されたのを受けて、伊勢御師が三嶋暦を買ひ受け、それを土産にすることの今井源左衛門宛の誓約書である。伊勢御師代八名の署名捺印があるが、ここでは太夫名ではなく、一般的な姓名を記している。

3、今井家の手先

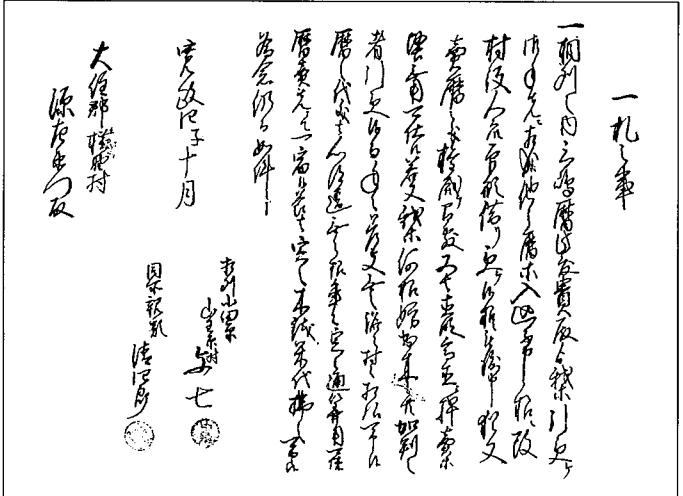
今井家の三嶋暦販売の手先となった人たちの、頒曆心得ともいべき今井源左衛門宛誓約書「一札之事」六点がある。

六点とも寛政四年(一七二二)十月付で、五点は親類一名が証人としてであろう署名捺印している。板戸村文書のみ峯右衛門の他二名が署名捺印し、親類の表記はなく一名は名主であるが証人であろう。

相模国での三嶋暦販売所が、

先の十日市場会所を始め、手先として次の六ヶ所にあつたことが知れる。

- ①三浦郡下山口村 名主 八郎左衛門
 - ②鎌倉郡雪下 名主 徳兵衛
 - ③藤沢宿取次所 三郎兵衛
 - ④上郡松田庶子 吉兵衛
 - ⑤小田原山王原村 与七
 - ⑥大住郡板戸村 峯右衛門
- ①②は、名主兼業である。③藤沢宿のみ「取次所」とある。
- ⑤山王原村与七の文書を右に示した。他暦の持込みを許さず、高値や押売りをしないこと等を誓約している。他の五点も殆ど同文である。
- 与七は暦会所とあつた湯川与七郎と同一人物であろう。暦会所として伊勢御師への販売をも請け負っていたことが先の文書から知れる。文政九年(一八二六)、小田原の質屋が年行司を決める文書(小田原市史)に、「山王原与七」とあり、同人は質屋との兼業が窺える。暦の販売は、九月から年末までに集中し、生業としては成り立ち難い。暦師河



秦野市横野 今井家文書

露国・日露の役俘虜のこと(28)

八十七年ぶりのお礼 後編(18)

内田善作記
吉田雪子編 「日露戦役従軍記録書簡往来」

故・隠岐威重

十帰隊(明治三十九年二月十七日)
帰宅(同年六月三日)
(二九〇号のつづき)

四月二十四日・夕

麹町衛士病院に入院
明治三十九年四月二十四日

内田善作より

内田重兵衛様

前略 本日午前十時頃無異入院仕り候間御休心下され度、通知下され候。

隠岐閣下逝去の義、正に承知仕り候。然しながら不肖も出征中満州に於いて閣下には一度も拝顔仕り候事は御座なく且つ御家内の方にも面会致せし事も御座なく候間、誠に書面の具合意の如くならず、亦名宛等も不明に候はば父上様より左の如く御伝言相成り度、何れ帰郷の上は参堂御悔やみ申し上げ可く候。善作より御悔やみ申し上げべくの処、負傷の為只今入院治療

中に付、欠礼仕り居り候間御諒察程云々。右の如く宜しく御取り計らい置き下され度願ひ上げ候。

六月三日午後三時頃善作帰宅：
善作の便り…これで終わり

さて、やつと善作氏の手紙を写し終えた。B-5のワープロ用紙裏表に三十枚、律儀な老女なのだ、ぎつしり打ち込んである。四百字詰原稿用紙に書き写してみたら百枚近くにも化した。やれ、やれ、でも一字一字丁寧に写していると中々面白い。眼だけでざーっと読み流していくより筆者の気持ちの裏がよく分かる。

明治の未曾有の大戦争、民族の存亡を賭しての戦い。その戦いに参する一庶民、巷の商家の若旦那の後備兵。旅順要塞攻防の激戦では幸い無傷で過ごした

が、奉天の大会戦、その最終日は三月十日と聞くが、一日前の九日、奉天駅北方包囲陣端の激戦で重傷を負い遂に捕われ、歩行困難な不具になり、ハルピン、モスコワと、彼にしては考えもしなかつた俘虜の旅。何か運命的なものを感じるが、それには触れぬ。

それより、彼の手紙を辿ると一見平坦。後方の家を、家業を、親戚、知人を思い、そして少しばかり国を、国家を思う。

手紙の後半、不具の体、その不自由さに対して殆ど一言の不平も述べぬ。まして体制批判のかけらもない。庶民の健全な明治の気風だ。そして捕われて後、特にハルピンから欧露までの滞在中に出した便りは表面的には現代のバック旅行記を読むようだ。内地からの入れ知恵で、この機会に出来るだけ外国を見て来いと言われた事を忠実に守っている。生真面目さが滲む。

だが、巧まず、所々の善作の知性、批評が行間に顔を出し、プチャーチンの批評、ノビコフ・プリボイの革命への準備活動、明治の日本と、帝政末期の露国との比較が出来る。

底に革命の流れがある帝政末期の露国であるが、善作の筆の中からそれを知るの中々。唯、旅順の帰還兵が要塞の武

器弾薬、食料の残余も捨てて城を開けた事を怒つての将校殴打事件、収容所があるメジメージは遼陽戦で戦死者が多く出た。戦死者が多いことは、この連隊地区で寡婦を多く出した事になる。でも、この二つのことは戦争に繋がる事で、革命とか社会不安とは無縁のことだ。不自由な体の不具の捕虜に、当時のロシアの社会情勢を求めることは無理な事かも知れぬ。それより、それを感じさせぬロシア人の、大口シヤ国のおおらかさか。

ロシアと言え、老人は昭和二十年の敗戦直後の撫順で留用技術者として二年ばかり過ごし、その時僅かだが露人との交流があった。

占領され、社宅の扉は木片を打ち付け不愉快な暴力訪問を防ぎ、巷では、家財等は勿論それこそ一片の木切れまで持ち去る中国人の暴動、露兵の強盗、強姦の声が高く、邦人は部屋に閉じこもり、恐怖におののいていた。

それでも二・三ヶ月経つと一応は落ち着き、老人達は元の職場に戻り、出炭に出油に、自身の、家族の、疎開難民の、命を守るために働き出した。老人のいた車輛工場も同じだ。

そして、その工場に警備の露兵が派遣されてきた。三十歳を

少し過ぎた男だった。イヴァンと言ったか。顎に青い髭を添え、背を少し丸めた姿勢でマンドリンと言われた自動銃を負っていた。

急な政変、日本が破れ結果的に中国が勝ったという事で、人工員は殆ど働かなくなった。邦人達、元から工場に居た者、沿線からの疎開同僚とも、もう後がないと必死で働いた。幸いに工場は無傷だったので運転も事欠かなかった。

その工場を警備に来たイヴァンには大した仕事もなかった。一日中工場内をぶらぶらしていた。中国人は露人を嫌い、「あのターピーズ(大鼻野郎)」と陰口を叩いていた。

負けても工場は元の組織で動いていた。老人は工場の車輛修理の責任者なので、イヴァンを捨てても置けず、だが、別に機嫌をとる必要もない、対等に付き合っていた。

付き合うと言うより、無駄口を叩いていた。まるで露語が喋れる様に書いたが、違う。手真似と、わずかに知っている露語を並べて喋った。内容も大したことはない。

どこの生れだ。何処から来た。親は、子供は、奥さんは、と。でも、そんな話題では長持ちしない、少しは込み入った話にな

る。天下がひっくり返った動乱の中だから、露国・中国・日本と三国の関係について、舌足らずの会話も少しはあったが大部分は忘れてしまった。でも、五十年近く経ったが、つまらぬ事だけ覚えていて。きっとイヴァンと二人で、三国間の話をしてきたのだろう。その間半分以上は老人に対するおべつかだったろうが。「キタエツ、ニエハラシヨ」と言った。

中国(満州)では国府、中共の勢力はまだ決まって居らず、流動的な政情であった。

中国人はほらが峠を決め込んでサボッテ居たのだ。ソ連と中国(国府)は表面は同盟国だ。だが、ソ連は中共に肩入れしている。ソ連の中核は労働者だ。その労働者がほらが峠を決め込む。イヴァンはそれを見て内心苦しかったのだろう。日系だけがソ連の命に服して無茶苦茶に働いていた。

たとえ、一兵卒のイヴァンでも、少しは天下の大勢を知っていて、先の発言「中国人は悪く日本人は良い」になったのだろう。

だが、老人は何時もの悪い癖で兵卒イヴァンを茶化した。「おい、イヴァンお前は中国人は悪く、日本人は良い」と言う

が、それは嘘だろう。

ヤポンスキー、とハラシヨの間にはマダムが入り、「ヤポンスキー、マダム、ハラシヨ」になるのだろうと言うと、イヴァンは片目をつぶり、ニヤツと笑って「ダー」と言った。そのイヴァンがしばらく経って浮かない顔をしていた。「なんだ」と問うと、「ヤポンスキー、マダムニエハラシヨ」と言う。きつと慰安所で悪い病気を移されたにちがいない。

イヴァンが去り新しい兵隊が来た。未だ子供(マーレンキー)に毛の生えたような若い兵でキエフの出身だと言っていた。乗馬が好きで何処からか支那馬を連れて来て乗り回していた。路上を馬で走り、中国人の露店に並ぶ林檎を盗み、その戦果を老人に差出し、食えと言って鼻に笑いじわをよせていた。善い奴等だった。個人としては誠にいい奴だ。付合いいい人種と言うが、国とか組織になると、これは誠に扱いくいとも言われる。

だが、老人の知る範囲では露国、露人は欧州の田舎者、田舎の国だ。西欧に、最近では米国に、何か羨望の目をむけ、物欲しうに、俺達は遅れている、習性として遅れているとぶきつちよに、執念深く思い込む。で、進んだ奴等は、俺を馬鹿にした

しないか、俺を騙しはしないかと疑い出し、とどのつまりは、その馬鹿力、大国の馬鹿力に頼り込んでいく。でも、その本質は誠にお人好し、好人の性があることは忘れてはいけない。個人として好人の習性は、衆としての猜(うらやま)の雲が晴れば共に談ずる国に変わる関数を充分含んでいることだ。

もう一つ、ウダウダ露国を語って来たが、その歴史を見れば露国の日本に対する一方的な片恋いの歴史だ。シベリア経営に不足する食料を求めると開国をうながす歴史だ。

武力で東進、南進して来た時も最近まであったが、今はその進むべき余地もない。また無理押しすれば世界中から爪はじきされてしまう。それは誠に損な勘定になる。

世は科学、技術、経営方式、もつとソフトな面も進んだ。下手に手を打てばそれを得る機会も失う。

で、此処で提案する。永年の露国からの恋文をこの際この辺で受けて見ようではないか。史上一回もない露国との蜜月もいではないか。

明治四十二年の冬伊藤博文がハルビン駅頭で暗殺された。その頃伊藤はこの北の巨人と結ぶことを熱望していた。明治新政

府設立の功労者はその末期には吾国の存亡は露国との友好を置いて他にないと信じ、日英同盟を押す派と鋭く対立していた。だが当時の諸般の情勢は整わず、博文の死により友好の道は消え、日露の仲は不発に終わった。

今現在は違う。日本は彼の国に与える物を少しは持つている。彼の国も受け入れる素地を、気持ちをも、抱いて来た。

彼の国からは第一次物産を貰う。黒貂だけでは困るが。そして彼の欲するものを与え、遅れている開発も手伝う。これがいではないか。もし本当に本心から彼らが欲するなら互いに突つ張らず一回やって見ようではないか。

善作の手紙、プチャーチン、

ノビコフの著書等が示す、日露の役の捕虜の、捕虜の取り扱いの善処が、百年前の処置が、現在の老人の気持ち、考え方を、そんな風にそえる。(つづく)

編者註

平成四年六月(二四九号)から掲載されてきた本稿は、筆者のロシアに対する豊富な知識と中国東北部で終戦を迎えた体験をもとに、趣き深い自筆の絵も添えて書かれたもの、後編(4)途中から吉田雪子さん編の内田善作さんが戦地から日本の家族、親戚、友人等へ出した手紙、日本から善作さんへの手紙も合せて「日露戦役従軍記録書簡往来」として掲載して来ました。次回の「後記」を以って終わります。筆者は平成五年一月に逝去され、

句鑑賞

他人ごとのようなわが齡冬桜 八嶋しづ江

作者は、戦中戦後の苦しい時代をのり越えて、今は平和な家庭生活を送っている。ある時ふつと八十年代になった自分、不思議なような他人ごとのような感懐をいだくのである。まだ若いつもりと思っている気持とは裏腹に、年齢は容赦なく増えてゆく。誰もがよく経験することである。しかし寒い季節に咲く冬桜のおやかな姿に、作者は喜びの期待感を悟ったのではないだろうか。これからの人生を精いっぱい楽しく生きる自信がわいてきたのである。冬桜の季語で綺麗によくまとまった句である。(劍持芳枝)

従って執筆時期は平成三、四年ごろと思われる。

掲載の通算番号に途中誤りが

四十年の奉仕活動

写真は、駅前「おしゃれ横町」

の一角にある北条氏政・氏照のお墓に捧げた供華風景です。月を違えて見る度に、生気満々の花風情で感心していました。

この演出は、北条顕彰会(おしゃれ横町・錦通り商店街の有志)の慈善事業がもたらした美德で、二宮尊徳の報徳精神へ恩徳に報いる生き方への実践を思い

あり、正しくは、今号で通算(28)後編(8)となります。お詫びの上訂正致します。

ます。

花は近くの「生花千草園」(桐山清氏)からで、生けた人は近くに住む降籬ツネ子さん(80歳)の奉仕活動でした。

ツネ子さん曰く「毎朝拝みにいっています。そしてお墓の前にあるコップ一個に水をあげて、墓地内を掃除します。時には花をとりかえます。これを四十年もやってきました。

いろんな人が見学にみえますので、いつでもきれいな状態に心がけてきました。

近頃は、市のボランティアの人がつれてくる人や、若い人が目立ちます。」

四十年にわたる縁の下の徳行に敬服し、よき街への奉仕を称えます。

(石綿 勉)



私の青春 ⑪

続 京都練習飛行隊と終戦

菅沼 博

七・七耗の機関銃弾の中でも対空戦闘用のものは、甲・焼夷・曳光弾の種別があり、十二・七耗弾についても同様であるところは承知していたのであるが、よく確認しないで、これは徹甲弾だと思つて作業に取りかかつてしまったのが間違ひの原因であつた。

機関銃弾には三種類の弾丸が連なつて装弾され発射される。外見は全く同じであつたが、弾丸の種類によつて外被の真ちゆうの色が若干異なつていた。

曳光弾はともかくとして、焼夷弾と徹甲弾とを見間違へたに違ひなかつた。その弾丸は共に弾の後側が鉛でふさがれ、単体で見た場合は、どちらが焼夷でどちらが徹甲であるかの判別はむづかしかつた。

徹甲弾の中身は鋼鉄の心があるだけで、その外側を真ちゆうの外被が覆つているだけであつた。

この事件があつてから、弾丸によるペンダント作りはやらなくなつた。

鞍馬山分遣隊での毎日の食事

のお菜は、馬鈴薯・かぼちやの煮たものが多く、米飯は飯合の底の方に僅かしかなかつた。しかし、かぼちやのお菜が毎日のように続いたが、量が結構多かつたため、空腹というのはそんなに感じられなかつた。

製材所の片隅に作られた竈で一日三食の食事が作られていたが、その作業に当たる兵隊は我々の同期生達ではなかつた。確か我々よりも年輩の兵隊で階級も我々よりも上だつたような気がする。

我々は未成年であるにもかかわらず、煙草は一日八本の支給があつた。私が煙草を吸うようになった最初の出会いが、この鞍馬山の分遣隊時代である。満十六才八カ月の若さであつた。夕食後は製材所の近くを流れる川の橋の上で、支給された煙草をくゆらせながら夕涼みをした。

ここには営門もなければ衛兵もいながつた。分遣隊長も班付下士官も我々に炭焼をさせ、のんびりと毎日を過ごしているようであつた。

班付下士官はともかくとして、分遣隊長ともなると炭焼作業に出たのを一度も見たことは無かつた。一日中何をしていたのだらうか。民家の下宿で昼寝でもしていたに違ひない。

このような生活をしている間にも戦局は終盤に近づいていった。

終戦となる前日か当日であつたかは記憶が定かではないが、八月十五日の十二時に原隊へ集合せよとの命令が伝達された。

我々は原隊を離れているため、先輩達から戦況を適時に聞くような機会を失つていた。そのため我々の耳には終戦・敗戦・戦争が終末に近い等の情報は何も聞かされていながつた。

山合の山村生活のため、そんなに戦況が逼迫して来たなんて知らなかつたのである。

ただ我々は先輩の十六期生の特攻訓練が終われば、次は我々の訓練が待ち構えており、あと数ヶ月で訓練が開始され、訓練終了次第特攻が待ち構えていることだけを承知していた。

八月十五日の朝、原隊へ十二時に間に合うように我々はトラックに乗車し、原隊へ出発した。

十二時から始まつた天皇陛下の放送は暑い炎天下の宮庭に編成ごとに整列し、不動の姿勢で

謹聴した。

我々の右隣には勤労動員と思われる女子学生がモンペ姿で整列していた。ラヂオは雑音が多く、感度が悪く何を天皇陛下が言っているのか全然理解することができなかつた。

しかし、隣の女子学生の中にはススリ泣きしている者がいた。私は、ああ天皇陛下の声らしきものを聞いたのはこれが初めてなんだな、だから感激して泣いているんだなと理解していた。

初めて聞き、雑音・感度が悪ければ、天皇陛下の話し方は普通の人間の発声ではないし、抑揚・話し方は火星人とでも言つた方がよかつた。

今でこそ、昭和天皇の話し方は国民の全ての人々が聞き慣れているが、当時は初めて耳にする声であり、しかもラヂオたるや、真空管の五球スーパーが最高の物であつた。

何がなんだかさっぱり解らず、雑音だらけの火星人のようなしゃべりの内容を理解しようとするのが無理と言うものであつた。

放送が終わつてから、司令官らしき者の訓辞のようなものがあつたが、その訓辞の中に敗戦・終戦等の言葉は何も無かつた。彼の言いたい要旨は、軍務に精

励せよというような内容のものであった。

司令官の訓辞の他に、分遣隊長からの命令・指示・放送内の説明はなかった。我々は、ただただ一所懸命に軍務に精励せよという天皇陛下のお言葉であったのだと理解するより他はなかった。

しかし、女子勤労働員学生の人か、嗚咽を噛み殺し、泣き声をだすのを我慢している様子が大ききでありしかも不思議に思えた。

その時は、天皇陛下のお言葉を耳にしたのは、生まれて初めてであり、感激で涙しているのだと我々は解釈していたのであるが、今考えてみると、すでに彼女達は軍務の傍らに、それとなく敗戦の放送であるということとを理解していたのだと思う。

司令官は恐らく敗戦に伴う訓辞を用意していたのかもしれない。しかし、現実に天皇陛下の声を聞き、何を言っているのかを理解しようとした時、自分の訓辞が天皇陛下の詔勅内容と符号していないと具合が悪いと、咄嗟に判断したのかもしれない。したがって、放送が終わる解散するときになって、あたりさわりのない、軍務に精励せよなんて言っておけばこの場合は済むと思っただけであろう。

司令官の訓辞が終わっても、我々の隊の整列は解散されることなく、他の隊或は民間人との私語さえ許される状態ではなかった。

終始隊伍を組み命令によって行動させられていた。このため、鞍馬山の分遣隊に到着しても何の放送であったのか、見当がつかなかった。

分遣隊長は鞍馬山の製材所の営内班前で解散するとき次のような指示をした。

「別命あるまで営内で環境整備」

民間人と接触を断たれ、営内に閉じこめられた我々は何もすることがなかった。

環境整備と言われても、我々は営内の整理整頓・清掃・武器手入れ等は僅かの時間でも惜しんで実施していたので、汗ばんだじゅばん、袴下を洗濯した位のものだった。

その間にも民間人と接触をとった者がいたのである。

「おい、聞けよ、戦争は終わったぞ、天皇陛下の放送は戦争が終わったという言葉だったらしいぞ」

現在の常識で考えると、外の民間人と交流し、はっきりした情報を得ればよいではないかと、或は軍隊の中の情報はそんなものなのか、とか一笑に付されることであろう。

しかし、我々が過ごしていた日本軍の小隊・中隊の中の軍規は小隊長・中隊長達本人はいざ知らず厳正に守られており、生やさしいものではなかった。

「営内班における環境整備」

この一言の命令で行ける所は、厠と洗面所だけ、この場所以外の所で発見された時、何と申し開きをすることができないか。命令に対する不服従ということと往復ビンタか上靴ビンタが待っているということになる。

とにかく、民間人との接触はこの時点で論外であった。

命令に違反した者はどのような結果になるかは各人がよく承知していたし、又、違反するような者はいなかったのが事実である。

ただ隊付下士官からの夕食時における命令は次のような変わった内容のものであった。

「明朝、朝食後非常呼集を行う。背囊・鉄帽を除く軍装とす。」

「四国沖に接近中の敵は四国海岸に上陸の可能性がある。」

ひそかに民間人と接触し、戦争が終わったらしいという事を我々は承知していたので、心中「アツ」と困惑の声を呑みこんだ。

理由は、分遣隊の営内には、軍服は一装から三装までの夏服・冬服とその外飛行服やら私物やら一式が置いてあるからである。

我々の心の中はすでに原隊へ復帰し、武器を返納して故郷へ帰るといふ筋書を脳裏に描いていた。

それが、非常呼集で軍装し、弾丸を持てるだけ持ち、三装の軍服で分遣隊を後にするという事はどのような意味があるのであろうか。

「背囊・鉄帽を除く軍装」

敵が四国海岸に上陸しようとしているのに、どうして背囊も鉄帽もいらぬのか。

この変な命令は、我々を着たきり雀で追い出そうとしていると我々は直観したのである。

兵隊が移動するときは一装から三装までの軍服一人分でも結構な量がある。その外に営内班の補給倉庫内にある保管物品の量も相当なものである。

『前田夕暮の歌碑』

を讀んで

標題の冊子(A5判22頁)を「新刊紹介」に載せるのは、馴染まない。

それは、昭和六十一年(一九六六年)二月二十六日神奈川県立秦野高等学校開校六十周年記念に当たって、杉山長風(茂夫)が標題の記念講演をしたとき、録音したものを杉山の教え子たちがテープ起こしして、手作りの冊子に纏めたもので、その発行部数は少なく一般の目にふれる機会が

少ないからである。当日の講演について人伝に聞いた話である。

講演は、一時間に及んだが、生徒たちは静かに耳を傾けていたという。異例なことである。どんな雄弁であつても十五分はもたないで生徒は騒ぎだすのが、昨今の事情であるということだ。杉山は、草稿なしに話をしたというが、この冊子に目を通すと成程と頷ける。前田夕暮

についての研究は素晴らしい。しかし、それだけでは生徒を引きつけられない。杉山の語り口が上手であつても、生徒は聞耳を立てない。流石である、随所に生徒が期待する言葉があり、夢を持たせている。

前田夕暮の歌碑は、十一基ある。うち秦野にあるのは二基で、その建立の推進者は、杉山である。

杉山は昭和十六年(一九四一年)秦野中学校に赴任して国語を担当した。間もないことだった。秦野が生んだ夕暮を教科書は採り上げていても、教師用指導書には全く記されていないことに気づいた。そこで夕暮の研究が始まった。

夕暮は、歌壇の主流を成していた与謝野鉄幹・晶子の「明星」に対抗すべく白日社を創立した。明治三十九年(一九〇六年)二十三歳のときである。

機会が来た。

秦野高校創立二十五周年(学制改革により高校となる)を翌年に控えた昭和二十五年十月、全校生徒集会で記念事業を何を選ぶかについて放課後討議が行われた。

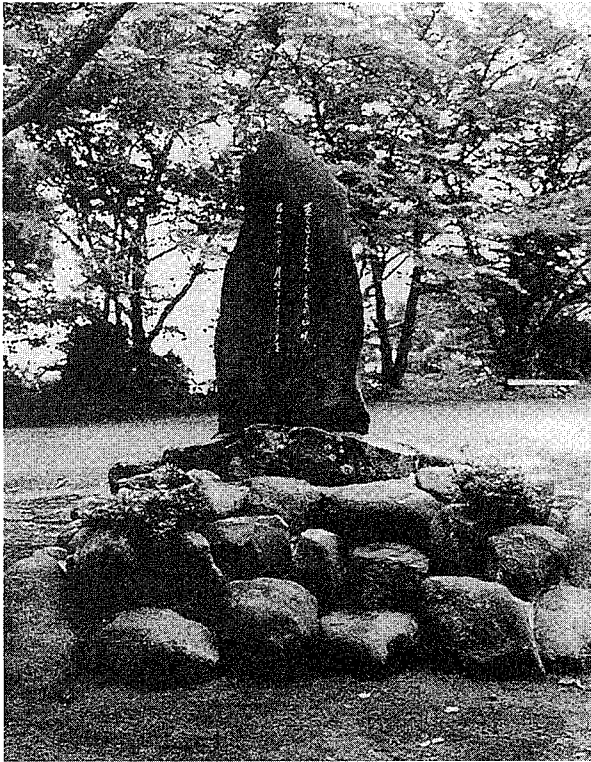
当時、各高校では文化祭と称する催しが行われたが、その実

情は、各校とも文化に値するものは何もなく、生徒の単なる遊びであつた。文化祭に金をかけても、終われば展示物を紙屑として処理しなければならぬ。高校によつては、日頃、勉強をしいる生徒に対するガス抜きのため、つもりで無関心の教師が多かつた。

全生徒は連日の集会でそろそろくたびれている様子であつた。「予算の事もあろうし、あれをやるう、これをやるう、といろいろ考えているようだが、秦野高等学校の生徒でなければ出来ないことやってみる。なにをぐずぐずしているのだ」と杉山は発破をかけ、少し間を置いて「文化祭などは日本国中どの高校でもやっている。とにかく秦野高等学校の生徒でなければ出来ないことをやるのだ。それはどうすることだとは、明日の生徒会集会で決めよう」と宿題にした。

次の日になった。ところが生徒に妙案があるわけではない。杉山はやわら口火をきつた。

「この大根に生まれ、中郡共立中学校(現・秦野高校)に学んだ我々の先輩の、明治・大正・昭和の大歌人前田夕暮の歌碑を、この故郷である弘法山上に立てることである」と、さらには明治以来歌壇の落合直文、正岡子



▲弘法山の前田夕暮の歌碑

平成15年 初詣ご案内

日時 平成15年2月8日(土)
 集合 小田原駅前(東口)7時30分
 雨天決行
 日程 駅前—小田原道路他—高麗神社
 (高麗王若光の創立、出世開運の神として知られる)—聖天院
 (歓喜天を祀っている、若光の菩提寺)—越生梅林他—小田原駅前 19時頃
 会費 5000円(含昼食代)
 受付 1月28日(火)午後2時より
 伊豆箱根トラベル小田原営業所にて
 多数の方のご参加をお待ちしております。
 今回もハガキは出ませんのでご注意ください!
 (係 勝俣 34-3939)

第4回史跡めぐり
“木曾路の旅”実施報告

11月7日(木)
 小田原駅前(7:30)—東名・中央高速—贄川宿(関所跡他)—奈良井宿—藪原宿—宮ノ越宿(義仲館他)—福島宿(関所跡他)—つたやグランドホテル泊
 11月8日(金)
 ホテル(8:00)—上松宿—寢覚の床—須原宿—野尻宿—三留野宿—妻籠宿(博物館他)—馬籠宿(藤村記念館他)—中央高速・東名—小田原駅前
 参加者 20名(氏名略)

規、佐々木信綱、与謝野鉄幹らの結社名を挙げ、大正にかけて「牧水夕暮時代」という固有名詞の歌壇をなした大歌人前田夕暮の歌碑を建てようと諄々と生徒に説いた。

この提案にたいして、三年生から拍手が起こり、次第に他の生徒に及びついに全校生徒総意の賛成決議となった。

杉山は同僚の国語教師と共に、病床の夕暮を東京・荻窪の自宅に尋ね、歌碑建設の申し出をした。夕暮は、生徒の純真な心を知り大変感動し、夕暮は歌碑のためあらたに短歌を創ろうとしたが、出来ないほど病状は進んでいた。

戦後間もない復興期にあたり、経済的に社会全体が貧しかった時代である。しかし、秦野町長は(昭和三十年市となる)秦野地方の文化発展の原動力となる立派な事業である、他の予算を削ってでもと協力を約された。援助金は観光課の所管であったと考えられる。また、町は消防車を出し、生徒が同乗し水無川の上流から歌碑の土台になる石をとり消防車・リヤカーで運搬、役場に集積、そこから消防車や農家の人の牛車で弘法山上に運んだ。弘法山は、人が歩む道だけで、その前に道路を作らねばならなかった。教職員・在校生有志は日曜・休日を返上して勤労奉仕に当たった。地域揚げての協力によって歌碑は完成したのである。

生くることかなしとおもふ山峡は はたら雪ふり月照りにけり

今では展望台が作られ、市民の憩いの場になっており、当時を知る人は隔世の感がするとい

う。

二基目は、秦野高校開校六十年記念事業として、学校の入口に建立、杉山長風の選歌・揮毫による。

まかないに朝の富士あり
 天雲をつらぬきて赤くそびえたるかも

杉山の発案により歌碑には台座がない。物凄いエネルギーで地中から突き抜けた形を表徴す

報 告

佐藤 光三氏
 小田原市飯泉五九
 昨年八月二十六日逝去。
 享年 七十八歳

星野 幸一氏
 小田原市扇町
 二一—一六一—三七
 昨年十一月一日逝去。
 享年 八十二歳

謹んで哀悼の意を表します。

(岡部忠夫)

るかのように、先端の尖った三角形の碑が地面より直に富士山の方向にむかつて立っている。尚、杉山長風氏は平成十四年十二月二十七日、急性心筋梗塞のため九十三歳で死去された。

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

飛鳥屋

紳士服のアメリカヤ

(株) アルファ

伝統工芸 石川漆器(株)

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

画材 ガクブチ ヨウエ

自動車修理 板金塗装 T-3マン

かまぼこ

小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スキヤマ

オリオン座

かまぼこ籠 清

カネボウ株式会社小田原工場

神尾食品工業(株)

木地挽 日下部産業(株)

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

国府津館

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のこぶく さくらい

箱根湯本温泉 春光荘
雀のお宿

小田原 小田原 小田原 小田原 小田原 小田原 小田原 小田原 小田原 小田原

辰寿堂スポーツ

大営不動産

高木整形外科医院

打うどん 小田原城趾前 田毎

網元直営 ぶる海

そびそ二宮

茶半家具株式会社

ちんぎら本店

角田ガクフ子店

東京電力(株)小田原営業所

トーホー建物 齋

割烹料理 鳥かつ楼

和菓子 菜の花

八小堂書店

八子マサ

平井書店

(備) 古屋花店

株式会社 報徳

建築金物(株) 家庭金物 星崎仲吉商店

本多時計店

栄町 松坂屋

学生専科 丸マルク

諸星運輸グループ

曾我の梅子 菫幸・かまぼこ 美の政

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円
〇〇二〇三二八四三三五六